論文の内容の要旨

論文題目　　徳川政治思想史における歴史と永遠――徂徠学から幕末思想まで
氏　　名　　島田英明

本論文は、歴史意識と政治思想の連関という点から幕末知識人の思想や実存意識の特徴を析出するとともに、それを徳川思想史の水脈のなかで適切に位置づけることを試みるものである。とりあげる対象は、服部南郭や太宰春台など徂徠学派の知識人から、吉田松陰や森田節斎など幕末期の志士と文士まで多岐にわたる。そうすることにより、幕末を〝近代への滑走期間〟として扱い、その政治運動の論理や西洋思想の受容に着目して、攘夷か開国か、尊王か佐幕か、封建的か近代的かを問うてきた従来の分析枠組を超えて、幕末政治思想を捉えなおすことが目指される。

論文は大きくふたつの部分から成る。

まず第Ⅰ部では、「不朽」「豪傑」「事業」「功名」といった語彙で語られる〝永遠性獲得願望〟――歴史の上に永く語り継がれたいという意識――の変遷を、徂徠学以降の 18・19 世紀の思想史の流れに即して検討することを通して、幕末思想史への新たな視座を用意した。

はじめに検討するのは徂徠学派である（第１章「古文辞学とふたつの永遠」）。よく知られたこの学派における内部分裂は、〝永遠性〟という点においても、相貌を異にする二つの型を有していた。すなわち、一方で服部南郭は、古のレトリックに習熟することで自らも古人と化すという古文辞理論に忠実に、過去の君子たちの詩情と言葉に己の詩情を重ね、やがて後世の君子たちもそこに詩情を重ね書きしてくれるだろうと期待していた。かくして南郭は、過去・今・後世を貫く永遠の位相を観念し、「今」に不遇な自己を解放することを得た。他方、たとえば太宰春台は、古文辞流の詩文を「模擬剽窃」と斥け、浅薄な詩文を通じての「不朽」気取りを嫌った。その代

り春台が重んじたのは、新たな「事業」を打ち立てる「豪傑」である。本研究では、伊藤仁斎や孟子、張横渠、商鞅らへの人物評を手懸りに、「事業」を通して後世へ語り継がれるという、南郭とは異なる永遠観を春台が有していたことを確認した。また、こうした豪傑像が、春台の経世策における理想的改革者像とも重なっていることを示した。

続いて、18 世紀の思想界を賑わした、ポスト徂徠世代の知識人（井上金峨、山本北山、本居宣長、杉田玄白など）を取りあげた（第 2 章「豪傑たちの春」）。総じて、彼らは南郭ら蘐園の文人が切り開いた＜思想・文藝の市場＞の発達という恩恵に浴しながら、詩文論としては古文辞を「剽窃」と切り捨て、代わりに＜前人の言わなかったこと＞を重んじた。男子たるもの「我詩」「自説」を吐け、さもなければ前人の「奴隷」である、という野心溢れるダンディズムである。かくして彼らは、様々な分野で己の新奇な主張を声高に唱え、そのことで「名」を得、「不朽」を夢見た。本研究では、いくらか軽躁なかかる新機軸の開拓を 18 世紀思想史――ポスト徂徠学の時代――の基調にとらえ、それが「豪傑」という自己規定に基づくものであったこと、それらが同時期における広範な「開け」の感覚を支えていたことを明らかにした。また、本稿ではあわせて、こうした「豪傑」気取りの氾濫へのアンチテーゼとしての寛政正学派の思想を分析した。

そして、かかる「豪傑」的風潮に憧れ、「史論」という新機軸の開拓により自他ともに認める成功を収めたのが、頼山陽であった（第 3 章「頼山陽と歴史の時代」）。山陽は、太平の閉塞感に苦しみながら、政治的偉業をうちたてる英雄豪傑それ自体ではなく、彼らを歴史に刻むことで同等の事業をなしとげる「文士」という自己意識のもと、斬新な叙事文と史論体を創出した。本稿では、こうした豪傑文士にふさわしい事業という点が、徳川後期知識界における〝歴史を描く〟ことの魅力を支える主要因だった点を確認した上で、山陽の歴史叙述を具体的に分析した。そｎ上で、天保期以降、山陽に見られた「文士」や「文体」の意識が希薄化し、文人的遊戯はおろか文筆業それ自体が否定的表象へと追いやられ、著作の流行とはうらはらに頼山陽その人まで無用な文人としての非難を浴びた様を瞥見した。それは、文筆業に「豪傑」の夢を託してきた「文士」の時代の黄昏と、より直截な政治的英雄への自己投影に基づく「志士」の時代――すなわち幕末――の幕開けを暗示していた。

第Ⅱ部では、上記の検討をふまえた上で、詩文や奇説や〝歴史を描く〟ことではなく、〝歴史を作る〟ことに人々が熱狂した幕末という時代に生きた知識人をとりあげ、彼らにおける歴史意識と政治思想の連関について討究した。

まずとりあげるのは、吉田松陰である（第 4 章「テロルの倫理　吉田松陰」）。松陰を歴史思想という点から眺めたとき、これまで多くの研究が彼における＜日本の発見＞――歴史的固有性の自覚に基づく国体論――にばかり注目してきた。しかし、より注目すべきは、松陰が和漢の別を問わず「史論」を嫌ったという事実である。幕末期に史論が書き散らされたことはよく知られているが、松陰は史論を過去の英傑たちへの無責任かつ無慈悲な論難とみなし、むしろ「史伝」（叙事）を通した感奮興起を重んじた（その際、彼は＜日本の発見＞以後も、日本以上に中国史の英傑たちに親しみ続けている）。そして彼は、自らの生涯もひとつの「史伝」とみなし、後世を感奮させ続けることで、永遠と化すことを夢みたのである。かかる歴史意識に支えられた〝自己の作品化〟が、松陰の政治意識や倫理を支えていた。

次いで、松陰の没後、西南激派の理論的指導者となった真木和泉をとりあげた（第 5 章「内乱

の政治学　真木和泉」)。「形は尊氏に似るも、心は楠公なり」や「大日本史恐敷候間、此節は見事戦死之積に御座候」といった言葉が象徴するように、真木も松陰と同じく、激動期に生きる己を歴史的「豪傑」に見立てることで過激な政治運動のエートスを調達し、無残な敗死に〝永遠性〟の夢を見ていた。とはいえ、松陰と異なり真木に顕著なのは、いわば〝歴史の必然性〟の感覚であった。真木は頼山陽らの「勢」概念をヒントに、徳川を既に歴史的「勢」に見放された敗者と規定し、朝廷に対して自らが歴史の主役であるという自覚と行動を求めた。本研究では、真木を通して、文久期における尊攘派の過激化の背景に、こうした〝歴史の必然性〟の感覚があったことを明らかにした。

最後に、上記の志士たちとも密接なつながりをもちつつ、ついぞ政治的実践には身を投じなかった文士・森田節斎をとりあげた（第 6 章「文士の幕末　森田節斎」)。京摂三備の有力な尊攘アジテーターだった節斎は、政治的実践とは距離をとりつつ、しかし幕末を生きた多くの文士たちのように「文人世界」の黄昏を嘆き「無用」を気取ることもなかった。節斎は政治的生に自己を燃焼させる志士たちとは異なり、彼らを後世へ書き伝えることに己の文筆の意義を見出し、それを朝廷における烈士顕彰政策と結び付けようと企図したのである。姑息な煽動家であるかのような彼の足跡も、かかる頼山陽以来の「文士」という自意識の所産であった。そして、それは、先の松陰や真木のように、後世からの視線を自らの活力源とし、政治的偉業（それは鮮烈な挫折でもよい）のもと永遠たることを欲した志士たちの夢とも正しく響き合うものだったのである。

歴史上に顕彰されることを夢見た志士たち、顕彰することに己の文筆の意義を見出した文士たちの軌跡は、たしかに、招魂社に見られる忠死顕彰や、戦争に臨んで「経国の大業、不朽の盛事」と高揚した近代の文士たちにつながるものであろう。近代国家は志士や文士の夢をよく体制にとりこんで、自発的献身をうながすシステムを築いていった。しかし、それだけではない。終章では、内村鑑三『後世への最大遺物』に見られる後世にのこす「紀念物」としてのおのれの「生涯」という思想を瞥見することで、頼山陽や吉田松陰らに見られた問題圏の近代への広がりを確認し、結びに代えた。